

森 一久様

2009.12.10.

伊原義徳

原子力 eye 原稿の改訂について

来年から始まる原子力 eye への連載に関し、中村編集長と連絡の結果、原案の「廃墟からの立ち上げ」(1回)を補足して、上下2回とすることになりました。

改訂案と中村編集長発 e-mail を添付します。ご意見があれば、お聞かせください。

2010.02.

廃墟からの立ち上げ（上）

1945年8月15日、日本列島は抜けるような青空の下に静まり返っていた。すべてを失い打ちひしがれた日本人は、明日をどう生き延びるのか。その半月前、東京工業大学では前学長で技術院総裁の八木秀次博士を迎えて、時局講演があった。「ポツダム宣言が発表された。近く戦争は終わる。どちらが勝つかは言わない。戦後の復興は諸君の双肩に掛かっている。」

連合国総司令部（GHQ）の指令のもとに、敗戦後の日々が過ぎていった。1947年9月に電気工学科を卒業したが、民間企業は東芝、日立をはじめ人員整理とストライキの只中で、採用試験は中止の時代である。商工省に採用され、機械局電気機械課で、電機メーカーのお世話役となった。物資直接統制の時代で、各社の生産計画と実績を勘案して珪素鋼板、絶縁油、電力などを割り当てて計算尺とソロバンでやる端末業務である。電気機械工業会といった業界団体が細部を調整していた。臨時物資需給調整官制度により、民間会社から多くの人々が臨時の役人になり、統制業務を行っていた。

GHQ経済科学部の指令が絶対命令であった。経済統計を整備し、情報を分析し、現場に出向き、実態に即した行政をと指導される。内心米国への反感を持ちつつも、その行政の合理性、科学性には大いに学ぶべきものがあつた。

48年末に貿易庁ができ、GHQから「従順ならざる唯一の日本人」と米国に報告されていた白洲次郎が、初代長官として辣腕を振るっていた。神戸一中の先輩で、吉田総理の側近として知られていた。その懐刀が永山時雄の官房長であつた。白洲次郎は雲の上の存在だが、天皇と称された永山官房長には、同期生を語らつて、技術系若手職員の出遇改善の陳情に押し掛けたこともある。給料は大企業の半額だが、皆日本の再興のため大きな志と夢を持っていた。わが国の行政は合理的な基礎としてみれば、早朝から仲間勉強会を開

廃墟からの立ち上げ（下）

我が国の科学技術振興のためには、行政の面においても、科学技術を担当する省庁を設置すべきとの気運が次第に高まってきた。1950年には、自由党前田正男衆議院議員の提案「科学技術振興決議」が衆議院で採択された。52年には、自由党が「科学技術庁設置」を政府に申し入れたが、実現は見送られた。その後も、松前重義社会党議員の提案があったが、既存省庁の反対が強く、実現は難航していた。

工業技術院調査課に移り、欧米の技術行政の調査と技術白書作成に努めた。また、官庁技術者運動の若手幹事役として、科学技術庁設立のため、国会との連絡役の使い走りを務めた。

1953年末に国連総会でアイゼンハワー米大統領が提案した“Atoms for Peace”に興味をもち、調査課は国会図書館分室として図書購入費もあったので、米国のニュークレオニクス誌購読を提案したが、「原子力発電などはまだ夢だよ」として却下された。

54年3月3日の朝、堀純郎課長から「国会の予算修正動議で、原子炉築造費が提案され、調査課がその予算を担当することになった」との興奮した声があった。4月には予算は自然成立し、原子力研究費の配分など、多忙の日々が続いた。第1号原子炉の設計研究から始め、ウラン燃料の製造と減速材の重水、黒鉛に研究費を支出した。海外への調査団の派遣も急がれた。

課長から「君は英語が話せるかね？」と聞かれた1月後の55年2月に、米国に原子力留学を令された。米国シカゴ南西にあるアルゴンヌ国立研究所に新設された「原子核科学工学学校」での研究生生活は、カルチャーショックの連続であつた。米国の資源・エネルギーの豊富さと技術力の高さを、今更のよう実感した。どうすればこの格差に打ち勝てるか。それには技術力を磨くしかないとの深く覚悟して、講義に実験に励んだ。校長のビルーは、世界最初の原子炉シカゴパイプ（CP-1）建設に若手物理屋として参加し、

てた物。あ
「君、た
切。うが
を。あ業
縄。ろで
に。だ癪
き。ある
と。です
の。割事
一。役従
万。むに
、込。目
て。し開
っ。と力
持。落子
を。に原
斧。心て
は。炉し
に。を国
時。棒帰
転。御は
運。制ち
理。原る
夏。子
子。力
で。数
せ。め
が。何
中。曾
超。党
利。用
研。究
後。の
と。な
な。っ。た。
の。予。算
が。国。が
そ。れ
し。た。
の。治。の
平。和
で。が、
査。の
基。盤
と。な。っ。た。

55年に、正力松太郎読売新聞社主が衆議院議員に当選し、11月に第三次鳩山内閣に初入閣した。総理から防衛庁長官就任を打診されたが、「原子力担当大臣をやる」と主張した。「原子力って何だね？」と総理は怪訝な顔をした。結局北海道開発庁長官に就任し、原子力担当大臣を兼ね返すのみで、その理由は説明もせず、サッサと法案を通過させた。「私は戦前、職業野球を成功させたい。戦後は、原子力博覧会を開き、機運を盛り立てたい。」と張り切った。英米から原子力界の有力者を招聘し、機運を盛り立てた。

56年1月に原子力委員会が発足し、正力松太郎委員長、石川一郎委員長代理、湯川秀樹、藤岡由夫、有澤廣巳各委員で構成された。その事務局として総府に原子力局が新設された。原子力の担当に生かす甲斐原を力委員に、原子力公社は、原子力研究所の導

伊原義徳（いはら よしのり）：１９２４年生まれ。
科学技術事務次官、日本原子力研究所理事長、原
子力委員会委員長代理を歴任。

Yoshinori Ihara

送信者: "中村悦二" <e-nakamura@jupiter.plala.or.jp>
宛先: "Yoshinori Ihara" <yihara@opal.dti.ne.jp>
送信日時: 2009年11月30日 11:22
件名: 拝復:原子力eye Re: 原稿案

伊原 義徳 様

毎日、目の前の作業に追われ返信が遅れました。ご容赦下さい。

原稿案を拝読しました。内容の濃い、まさにこれから次代を
になう方々に読んでもらいたい原稿と思います。

史実を追うより、個人的な体験・感想を交えての原稿の方が
面白いです。

確かに、1回で済ませるにはもったいない内容。後半の後ろの
方を2回分に回して、上下にすることでいかがでしょうか。

ご検討をお願いいたします。

中村 悦二 拝

(株)日刊工業出版プロダクション

原子力eye

編集長

〒103-8548

東京都中央区日本橋小網町14-1

Tel: 03-5641-8355

Fax: 03-5641-8360

Eメール: e-nakamura@jupiter.plala.or.jp